



故 藤高周平教授

UDC 92 (Fujitaka)

藤高周平先生を悼む

森脇義雄・河村達雄

元所長 藤高周平先生は昨年 11 月 26 日午前 11 時 13 分、60 才をもって東大付属病院で逝去されました。思い起こせば昨年 6 月 9 日日本学電気電子関係教官一同が上野精養軒につどい、先生の還暦をお祝いした際には先生はまことに元気で、なごやかなふんい気の中に先生のご健康を祝い、退官後のご活躍をお祈りした矢先だけにわれわれ一同の驚きと悲しみはひとしおであります。思いなしか夏ごろからややお疲れの様子で、ときにはご自分の健康について心配しておられるようにも受け取れることばをもらされることもあったのですが、わずか 2 カ月足らずの療養生活で逝去されたことは痛恨のきわみであります。あのとき強くドック入りをおすすめしておけばよかったと思いつても、後悔先に立たず、先生を失ったことの生研およびわが国の電力界に対する損失をいままさらのように惜しんでいる次第であります。

藤高先生は昭和 5 年に東大工学部電気工学科を卒業後ただちに東京工業大学に勤務され、講師を経て昭和 6 年 11 月助教授に就任されました。昭和 17 年 4 月には東京大学第二工学部教授として電気工学第三講座を担任され、さらに昭和 24 年 5 月東京大学生産技術研究所勤務となられ、電力工学を担当されました。昭和 36 年 3 月より 3 年間本研究所長に任ぜられ、さらに昭和 38 年 6 月東京大学工学部教授に併任され、電気工学第三講座を担当しておられました。

先生の今日までの業績を顧みますとまことに産学協同を身をもって実践されたともいえるものと思います。東京工業大学在職中には外部撮影型陰極線オシログラフを世界にさきがけて開発し、これによって高速度瞬時現象の測定技術を飛躍的に進歩させ、これを用いて今日まで約 30 年の長きにわたり、北は東北より南は九州まで雷実測を実施し、貴重なデータを得られました。かような実測の過程からヒントを得て開発した F 型（藤高式）送電線故障点標定器は現在各所の送電線で実用されております。また室戸台風を契機にわが国の送配電系統の塩害事故がひん発し、送配電線用がいしの汚損対策が重要問題となりましたが、先生はその先駆者として学界ならびに電気業界の指導に当たり人工汚損試験法の確立に多大の功績を残されました。また鉄道電化に際しては安全委員会委員ならびに多くの技術委員会の長として絶縁の合理化をはかり、さらに東海道新幹線の建設に当たっても指導的な役割を果たされました。

これらの先生の功績により電気学会より昭和 26 年には大同電力記念賞金、昭和 41 年には学会の最高の榮譽である功績賞を授与されました。また学会活動としては電気学会において数多くの研究委員会の委員長、評議員、編集、調査、総務各理事、東京支部長、副会長などを歴任し、さらに電気規格調査会会長、電気協同研究会理事長、通商産業省大型プロジェクト MHD 分科会会長としてそれぞれ指導的役割を果たし、学会の発展に多大の貢献をされました。

先生の研究活動は国内学会のみにとどまらず、国際的にも知己が多く、国際電力技術会議理事、国内委員会副委員長として活躍され、同会議ならびに国際電気標準会議にわが国の主席代表として前後 5 回にわたって出席され、わが国の研究業績を広く世界に紹介されたほか、昭和 41 年 10 月東京で開催された世界動力会議にはゼネラル・レポータとして活躍されるなど最近の精力的な活動はまことにめざましいものであります。

先生は一見豪放で非常に親しみやすく、先生の主宰する委員会は和気あいあいの中に進行するというようなふんい気にはありましたが、また人の気のつかない点をずばりと指摘されるような面もあり、まとまりにくい電力界の技術的問題を一つ一つ解決してゆく最適任者であられました。この反面きわめて細心で、またよく人の世話をされるなどわれわれ後輩はいながらにして教えられるところも少なからずありました。

多忙な学外活動にもかかわらず、生産技術研究所においては 2 回の第 3 部主任のほか各種の委員を歴任され、技術管理委員会および特別研究審議委員会の委員長として研究所の運営に参画され、さらに所長としてはわが国における宇宙開発研究の組織の強化、研究体制の確立に多大の寄与をされ、また生産技術研究所がわが国の科学技術の急速な発展に呼応して研究の活発化をはかるため、千葉から麻布への移転実施に取り組みされ、当所の麻布における研究の基礎をかためられた功績も大きく評価されるべきでありましょう。ここに重ねて先生の偉大さを思い、痛惜の情を新たにす次第であります。